

民主主義の課題とゆくえ

評論家 佐高 信

◆はじめに

ご紹介いただきました佐高です。政治コラムニストの早野透さんと YouTube でお届けしている、「ジジ放談」で先日話したことから始めさせてもらいたいと思います。

元号が令和に変わったということで、新聞が号外を出しました。大正のときは緒方竹虎という朝日新聞の記者で、後に吉田茂内閣の官房長官になる人がスクープして号外になりました。ところが、令和はスクープでも何でもないわけです。それを号外するという事は、新聞は官報かということですね。それをまた争ってもらう人もいるという、信じられないことになっています。

石橋湛山という人がいます。彼は岸信介を自民党総裁選挙で破って自民党総裁になって首相になりましたが、この石橋湛山が 1946 年、戦後すぐに、元号を廃止すべしと東洋経済新報（現、週刊東洋経済）に書いています。世界で起こったこと、国際的なことを元号でいうと分からなくなる。また、明治、大正、昭和、平成で歴史が途切れるわけではないし、令和になると問題がなくなるという話でもありません。

私は国家、国というふうなものの水位が高くなったときに民主主義は沈没すると言っています。元号や天皇をしょうがねえやっていると民主主義は沈んでいくんです。それからもう一つ、民主主義の真反対にあるのが戦争です。だから、戦争と国家にどう対峙するかというのが、民主主義にとって欠かせないポイントです。歴史の断絶というか、あるいは横と縦というか、両方において歴史を考えさせないようにする働きが元号にはあります。

◆言語は暮らしそのもの

何年か前に安倍首相がアメリカの議会に行って英語で演説したことがありました。私は、おかしいだろと書いたのですが反響が芳しくない。それにまたガックリきました。どういうことかということ、状況も違いストレートに比較はできないけど、例えば文在寅が日本に来て、日本の国会で日本語で演説したとします。韓国に帰れないですよ。あるいはメルケルが同じように、アメリカに呼ばれたときに英語でやりますか。絶対ドイツ語でやると思います。

どういうことかということ、言語は暮らしそのもので

す。それを植民地でもあるまいし、なんで英語でやるの。あ〜、安倍政権は続くなと私は思った。EU は通貨を統一してユーロになりましたが、言葉は統一していません。ものすごくお金をかけて通訳を雇って翻訳もしています。暮らしは統一できないということです。日本人は韓国、朝鮮と違い言葉を奪われた経験がありません。私に言わせれば、暮らしを奪われた経験がないということです。だから、英語の演説に反応が鈍かったと思います。

内閣になぜ英語で演説したのか、衆議院議員（社会民主党）の照屋寛徳が質問主意書を出したら、訳の分からない答えが返ってきた。だけど一番見逃せないのは、アジアでは日本語でやってますと堂々と言ってきたことです。強烈でしょう。大日本帝国の考え方そのままです。何が民主主義であり、何が暮らしなのかということを考える必要があると思います。

◆暴力団が左翼!?

戦争についても、いろんな角度から考えなくてはならないと思います。私が一番分かりやすくて感心したのは、暴力団対策法です。皆さんも、暴力団といったら、やっぱり取り締まったほうがいいと思うかもしれない。しかし私は、田原総一郎、西部邁らと右と左の両方が一緒になって、暴対法反対の記者会見をしました。なぜ反対したかということ、法律は何かやったことについて罰します。ところが暴対法は暴力団であるという、いわば身分で罰するんです。だから、法律の趣旨に反するわけです。

山口組が暴対法は違憲であると訴訟を起こします。そのときの弁護士が遠藤誠という人でした。この人は釈迦とマルクスが大好きで、自称「釈迦マル主義者」だとかいっている人ですが、オウム事件の弁護なんかもやりました。5 代目組長の渡辺芳則は、遠藤誠は左の人、いわば赤の人だから、弁護を頼んでいると山口組が左になっちゃうと忠告されたそうです。そうしたら渡辺が、「先生、今、右と左を分ける目印ってのは何なんだろう」と質問しました。すると遠藤が、「前の戦争を侵略とみるかどうかでしょう」と言ったそうです。そしたら、すかさず渡辺が、「先生、それは侵略ですよ。他人の縄張りに踏み込んだんだから」。分かりやすいね。遠藤誠がびっくりして、「組長、そんなこと言うと、組長も左だと言われますよ」というと、「それで



左と言われるなら、わしゃ左でええ」と言ったそうです。すごい見識です。今この国は首相よりも山口組の組長になるほうが難しいかもしれません。

◆ベルリンオリンピックで優勝した孫基禎

先日、マラソンの指導者の小出義雄さんが亡くなりました。高橋尚子がシドニーオリンピックで優勝したのが 2000 年です。そのときに、「日本人選手として 64 年ぶりのマラソンの優勝」と書かれました。ただ 64 年前に誰が優勝したのかについては、ほとんど書かれなかった。なぜか。1936 年のベルリンオリンピックの男子マラソンで優勝したのは、孫基禎だからです。1910 年に大日本帝国が朝鮮を併合した植民地下で、彼は日の丸を付けて走りました。でも孫さんは日の丸を付けて走らなかつた。君が代も歌いたくないから、表彰台でうつむいている写真があります。またこの時、月桂樹を前に抱えて胸の日の丸を隠しました。高橋尚子が星条旗付けて走ったようなものです。

孫はその後、日本の大学に入りたいと思ったけども早稲田が拒否。明治大学に入ることができたのですが、金メダルの人に陸上やらせませんでした。彼は死ぬときに、箱根駅伝を走りたいと言ったそうです。

彼の優勝はさらに波紋を呼んで、十何日か後に、当時の東亜日報という新聞が、孫のユニフォームの日の丸を消した写真を掲載しました。これを朝鮮を統治するために設置された朝鮮総督府が気付いて、書いた記者と社会部長を捕まえて拷問をします。上の命令だろうって。つまり社長を捕まえたかったんですね。でも拷問に屈しないで、社長が捕まらなかった。しかしながら、東亜日報はその後、無期限の発行停止となりました。

1970 年ぐらいになってから、ベルリンにある孫基禎のブロンズに書いてあるジャパンという文字を、韓国の実業家らしいのですが削ってコリアと書き直した。そしたら、ベルリンのほうから、IOC を通じて、日本オリンピック委員会に、どうするかって問合せがきました。元に戻してくれって言ったんですね。別にいいじゃないかって。日本が走ったわけじゃないでしょ。走ったのは孫基禎です。彼がやだって言ってるんだからコリアにすればいい。こうしたさまざまな歴史があります。

◆軍隊は国民を守らない

今年になって『反-憲法改正論』（角川新書）という本を出しました。護憲派列伝です。憲法の問題も学者がいろいろ難しいこと言うと、どんどん分かんなくなってきましたが、保守の人でも護憲派がたくさんいました。宮沢喜一さん、後藤田正晴さん、野中広務さん。そういう人も含めて書いてます。ここで強調したいのは、軍隊は国民を守るものではないということです。ちょうど 2000 年に、当時の統合幕僚会議議長、自衛隊の制服組の一番偉い人が『日本国防軍を創設せよ』という本を書いた。その中でこう言ってるんです。「自衛隊は国民の生命、財産を守るためにあると誤解している人が多い」。つまり守らないと言うんです。国民の生命、財産を守るのは警察の役目ではあっても、武装集団たる自衛隊の任務ではないとはっきり書いている。いくら私がこれを力説しても、「やっぱ佐高だわ、なんかちょっと偏ったこと言うもんな。最後は守ってくれるんでねえか」って言う雰囲気です。自衛隊は国の独立と平和を守るんです。これは国民の生命、財産と関係ないわけです。

実際、歴史を見をみれば明らかです。旧満州に関東軍という一番強いと言われていた軍隊がいました。そこにソ連が入ってきたとき、関東軍が一番先に逃げ出しました。これはネトウヨも否定できない。それで中国残留孤児が生まれたわけです。あるいは沖縄地上戦では、アメリカ軍に居場所が知られると言って、赤ん坊の泣き声を封じるために殺したのは日本軍です。沖縄で軍隊は住民を守るなんて言ったら笑われますよ。では本土だけは守る？ 守らないでしょ。

安倍首相が自衛隊をわが軍と言いました。自分の思っていること言っちゃった。中国で天安門事件のときに市民に発砲したのも軍隊です。軍隊はそういうものです。時の権力者を守る。外に向かってではなくて、内に向かってるんです。だから私は軍隊はいらない、自衛隊は災害救助隊にして武器を取り上げろって言ってます。非武装中立は、私たちにとっては決して空想ではなくて、非常に現実的な案です。

◆軍国の母

『夢千代日記』という映画があります。吉永小百合が演じる夢千代は「はる家」という芸者置屋を母親から継いでやってる。そこにおスミさんという女中のおばあちゃんがあります。その人がお母さんじゃないかと中国残留孤児が訪ねてくる場面があります。おスミさんは満蒙開拓団で、旦那が団長かなんかで自決して、自分が息子の喉を突いて殺そうとして、自分は殺したと思って、自分がたまたま助かって帰ってきた。ところが、殺したと思っていた息子が生きていたわけです。その残留孤児は子どもである証しとして喉の傷を見せます。でも、おスミさんは見られない。自分が殺そうとして

つけた傷です。でも最後には認めて泣き崩れる。きつと実際あった話ですね。これだって精鋭を誇る軍隊が守っていたら、そんな悲劇は生まれなかったわけです。

それから、作家の吉武輝子さんに聞いた忘れられない話があります。戦争中は産めよ（軍人を）増やせよという時代でした。軍人一家の長男に嫁いだ加藤まささんという人がいて、その人が続けて女の子を産むんです。そうすると、「けっ、また女か」って話になるわけです。で、3番目によく男の子が生まれて、手のひらを返したように万歳となります。加藤まささんは、その子をスパルタで鍛えて軍人にすると、広島県江田島の海軍兵学校から特攻隊に行くことになります。いよいよ戦地へ行くときに、最後のお別れのあいさつに来た息子に、加藤まささんは先祖伝来の短刀を渡すんです。つまり、捕まりそうになったらこれで死ぬということですね。息子はその短刀を受け取って、まるで上官に対するような敬礼をピッと出発していく。10日ぐらいて白い箱が届きます。中は骨なんてありません。切っておいた髪の毛だけです。当時、「生きて還ると 思うなよ 白木の柩（ひつぎ）が 届いたら 出かした我が子 天晴れと お前を母は 褒めてやる」という歌、『軍国の母』が大流行しました。それで、死んだ人は軍の神様、軍神とたたえられ、その母親は軍神の母と新聞に書き立てられる。彼の遺書には、「後に続く者を信ず」と書いてあったそうです。しかし、その遺書もちろん検閲を受けていて本当のことは書けない。特攻隊だから、ほとんど死ぬんだけど、彼は何人かの仲間で、もし万が一助かったら本当の遺書を届け合おうと、もう一つの遺書を書いていました。で、奇跡的に助かった人がいて、その人がまささんの家に訪ねてきます。そして、その遺書を仏壇に上げて帰っていく。取るものも取り敢えず、加藤まささんは遺書を開く。そこには震えるような文字で、「僕はただ母さんに黙って抱いてほしかっただけなのです」と書いてあった。つまり、短刀なんか欲しくなかった。ただ黙って抱いてほしかった。それを読んだ加藤まささんは慟哭（どうこく）します。私が殺したんだと。それ以後、まささんは南方の島々を旅して特攻の残骸を見つけては祈りをささげる旅を続けます。当時、息子に短刀を渡したのは珍しいことではありません。フィリピン・ルバング島に太平洋戦争が続いていると信じ、30年にわたり滞在しつづけた元陸軍少尉の小野田さんの回想録にも、母親に短刀を渡されたと書いてあります。このように国や社会が軍国の母になってしまうわけです。

皆さんご存知の三國連太郎さん、佐藤浩市の親父です。今、佐藤浩市が首相の役をやりたくなかったとか言って、ネットで騒がれてるんでしょう。その三國連太郎さんとお話したことありますが、彼は抜群にもてた。息子の比じゃないね。女優の太地喜和子が北海道まで追っかけてたっていうんでしょ。その三國連太郎

が1943年の20歳のときに、召集令状が来ます。この時、三國さんは中国に逃げようとして、途中で母に手紙を出します。しかし、母は憲兵にそのことを伝え彼は捕まります。彼は戦後、母親の葬儀で柩を担ぎ上げたときに、背筋にぞっと冷たいものが走ったそうです。自分はどこかで、自分を国に売った母親を許していなかったんだと思ったそうです。つらい話です。今の政権も、母親に息子を国に売らせる思想がありますね。これはまさに民主主義と完全に対立する考え方があります。

◆民主主義は闘いの中でしか守り得ない

よく卑怯者とか言うけど、何にとつての卑怯かということがあります。戦争当時、徴兵忌避は卑怯とされるわけです。強烈な弾圧を受けることが分かっているのに歯向かうことは、逆の面から見れば、ものすごく勇気ある行動です。それを卑怯という形でくくろうとする。それがいわゆる常識とか道徳です。今のネット状況の中で言えば、やっぱり多数派に立たないということが大事だと思います。

シリアで武装勢力に拘束されていたフリージャーナリストの安田純平さんを多数が批判する。でも、少なくとも非難する側には回らないでほしいと思います。安田純平さんは捕まったとき、日本は広島、長崎であれだけひどいことやられたのに、どうしてアメリカに付いていくのかって言われて、答えられなかったと言います。日本は、核禁条約にも入らない。

アメリカの病根も深いけれども、アメリカの場合は、反復力というか復元力、それに反発する力も強い。でも、日本は残念ながらそうした力が弱い。アメリカの新聞は訴えられることを覚悟して訴訟費用を積み立てているけど、日本の新聞はそんなことしていません。権力と対峙した場合には訴えられる覚悟で、やっぱり踏み出さなきゃいけない。ところが日本の場合は、みんな上品で、裏取って書けとかって。裏取って書けるようだったら、すでに警察が捕まえてるって話ですよ。

だいぶ前ですが、新聞記者の集まりに呼ばれました。「皆さん方は新聞記者を上品な職業と勘違いしているけど、それは違う。起源、起りからいっても新聞記者はゆすり、たかり、強盗の類いなんだ。それに徹せよ」って言ったら、会場が静かになっちゃった。誰が佐高なんか呼んだんだと。でも、帰るときに若い女性記者がつつつて寄ってきて、「佐高さん、私、立派な強盗になります」って。あの人の中堅記者で頑張ってるのかなと思います。民主主義は黙ってて守られるものではありません。いろんなものとの闘いの中でしか守り得ないものであることを強調して、私の話を終わらせていただきます。失礼いたしました。

(さたか まこと)